

入選

テーマ3：多様性を認め合う社会をめざして 「私が私らしく生きる」と

長崎県・青雲高等学校3年 劉綾音

私は幼い頃から、「男っばい」と言われることが多かった。外で遊ぶことが大好きで、おままごとよりも戦隊ごっこを好んだ。いわゆる、「男勝りな女の子」だったのだ。生傷が絶えない日々で「女の子なんだから、もっとおしとやかに」とよく怒られた。その度に私は「男だったらよかったのに」と思っていた。

幼いころから「もつと女らしく」と言われ続けた私は、いつの間にか自分の「女らしい」部分を嫌悪するようになっていた。男性に恋愛感情を持つ自分自身が嫌悪の対象となり、思春期を迎え、胸が膨らみ、月経が始まることは私が女であることを強く私に自覚させ、とてもないストレスとして降りかかった。それでも私は「女らしい」自分を演じ続けた。そのうち、私は自分らしくさと社会が求める「女らしく」を混同し、自身自身を見失った。

そんな中、ある中高生向けの性教育ドラマを観たことが私の転機となった。そのドラマには、ある女子高生がアセクシユアルを自認するというエピソードがある。アセクシユアルとは同性にも異性にも恋愛感情を抱かず、性的魅力を感じない性的指向のことだ。私は久しぶりに自分の輪郭をとらえたように感じた。当時の私は、彼女に強く共感し、自分がアセクシユアルだと自認することで、自分自身を受け入れることができた。

それから私は自分が何者なのか知りたい一心で、多くの本や論文を読んだ。そして、自分の性的指向や性自認が決まっていけない、または意図的に決めていないクエスチョニングだと自認する。「性」について悩み続けた私は、自分の性を決めないという、一見、矛盾しているような選択肢を取ることにした。当時、高校1年生の私にとって、自分を素直に認めることができるすてきな選択だったのだ。

そして、セクシユアリティについて勉強するうちに、「性」とは性自認的指向、身体の性、心の性の主に四つから構成されるという一つの知見を得た。その時から、私にとって「性」は自分を縛るものではなく、自分を認識するための一つの方法となった。

性的指向や性自認について十分に知っている人はいまだ少ない。しかし、それらについての知識は、私のアイデンティティーの確立において大きな役割を果たした。また、私が素の自分を受け入れるための第一歩になった。

ただし、自認してすべてが解決する訳ではない。社会的に「普通でない」自分を受け入れられなかったり、他人に否定され、自己嫌悪に陥ったりとさまざまな悩みが生じる。そんな時に忘れてはいけないのが、セクシユアリティは自分を知る一つのきっかけに過ぎず、自分のすべてではない、そして、自認して決定しなければならぬものでもないということだ。

私はそのことに気づいた時、将来の夢が決まった。世界中の人々をつなぐジャーナリストになることだ。性的マイノリティなど、世の中に潜在する少数派の存在を多くの人に伝え、性に限らず個人を構成するすべてのことを互いに認め合う必要性を啓発していきたい。そのためには、広い層に正しい情報を広め、互いの理解を促す必要がある。そのうえで、多くの悩みや苦しみを抱えた人がいることを社会に訴え、そういった人々が悩みを共有したり、解決策を談論したりするための空間を作りたい。そこでSNSやマスコミの発信力が役に立てると考えている。

今でも私は、「性」について悩み続けているし、苦しむこともある。しかし、私は正しい知識を集め、見聞を深めることが自分を受け入れ、肯定するための一つの道だということを知っている。そんな私だからこそ、一人で悩んでいる人に寄り添い、一緒に乗り越えることができるはずだ。そして、この多様化していく社会の中で自分らしく生きていくための一助になりたいと思う。

なぜなら、多様性を認め合う社会を目指して、そんな世界への変革を担うことこそが、「私が私らしく生きる」ということだから。